

フィールド風

(現場)からの

宮田守男

10月中旬、伊那市で開催された第14回全日本ハイシニアソフトボール大会の審判に当るために朝3時台に起床、4時台に自宅を

自家用車で出発。初日は降雨でグラウンド状況が悪く中止となり帰宅後、翌日再度伊那に向かった。沖繩県を除く48チームにより熱戦が繰り広げられた。67歳以上の選手でのチーム編成だが各都道府県の予選を勝ち抜いた強者揃いで攻守とも好プレーを垣間見ることができた。京都府と山口県代表の試合での球審、翌日も別グラウンドで京都府の試合の塁審を務めたためか、京都への帰路の際、チーム選手全員から笑顔で「有難う」の言葉を掛けられる。思う存分、試合を堪能したのだから

うか。審判冥利を感じ嬉しくなる。

日本で初めてのラクビーワールドカップが開催され、ラクビー文化が日本中を感化。ラクビーの魅力。試合が終われば同じラクビー仲間であり敵味方は無いと意味する「フーサイドの精神」のラクビー文化に酔ったせいなのか、ソフトボールの試合の場面でも、最後のチーム同士の挨拶もこれまでの握手だけでなく、お互いの健闘をたたえ合い、ハグす

年齢にこだわらない 楽しみ方が大切な

審判に当たった。その中でも歳を感じさせない審判員の桜田浅吉さんに驚かされた。どの上部大会に行っても最高齢と言う85歳。「まだ現役のピッチャーだよ」とほほ笑む。審判動作も最新審判実技の動きを機敏にこなした。

動きを機敏にこなした。リチウムイオン電池の開発でノーベル化学賞に決まった吉野彰さんの言葉。「壁にぶち当たるとはしょっちゅう。どうせ乗り越えなきゃいけない壁なら、早く出てきて有難い。そうポジティブに考えた」、研究者には柔軟性と執着心の二つが必要だ。剛と柔のバランスを取る事が大事、「忙しい時に、ぼっと半日ぼとする事が無い時、アイデアがぼろっと出てくる」。人類への貢献に対して送られるのがノーベル賞だ。自らの発明には絶

対の自信を持っていたと東奥新聞のコラム天地人さんが吉野を紹介した。大規模災害の情報を知った時に「命ある限り研究を続ける」

どの言葉は、中高年にとって励みになるだろう。(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)



試合でのお互いの健闘をたたえ合うのがスポーツの魅力だ